

## <行動分析学の歴史インタビュー③>

# Evolution of a Behavior Analysis Department: How it was formed, and where it is going to be

Sigrid Glenn, Ph. D. (University of North Texas)

2013年5月25日、米国ミネソタ州ミネアポリスにおいて行われた、第39回国際行動分析学会年次総会期間中に、フロリダ州立大学名誉教授の Pennypacker 博士と州立北テキサス大学指導教授の Glenn 博士にお時間を頂きインタビューをしました。国内外の行動分析学の歴史に関する資料を収集・保存する事業の一つとして、海外の行動分析学者に、1) 行動分析学を学んだ経緯、2) 興味のある研究、3) 日本の行動分析家へメッセージ、の3点を軸にして、ざっくばらんにお話しいただきました。

Glenn 博士は、テキサス州立北テキサス大学に、世界で初めての「行動分析学部」を創設し、初代学部長となりました。また、1990年代後半より遠隔地教育にも力を入れ、学生から専門家への数々のインターネットコースを創設されました。グレン先生の詳しい業績については、先生のホームページ\*1をご参照下さい。



Glenn 博士  
(<http://sigridglenn.org>より)

### 1 : Introduction

**Interviewer (以下、I) :** 日本行動分析学会のインタビューを快くお引き受け下さりありがとうございます。私たちは、日本の若い世代の行動分析家に紹介したい海外の行動分析家の、歴史的背景などをインタビューしています。

**Glenn 博士 :** このようなインタビューは非常に光栄です。

**I :** そう仰っていただきありがとうございます。私も母校の先生に、このような形でインタビューできることを光栄に思います。さて、インタビューにあたり、行動分析学の歴史における業績と、ご自身についてわかるように先生の職務経歴書 (Vita) を参考にいたします。先生は現在、北テキサス大学\*2の指導教授でいらっしゃいます。北テキサス州立大学で臨床心理学の博士号を取得されました。

**Glenn 博士 :** 現在の北テキサス大学です。

**I :** そして、Center for Behavioral Studies を創設した Don Whaley 教授の亡き後、1983年に引き継がれました。その後センターを行動分析学部に成長させたのですか？

**Glenn 博士 :** そうです。

### 2 : The encounter with behavior analysis

**I :** それでは、どのように行動分析学を専攻されたのですか？職務経歴書を拝見する限り、学部生時代は、州都オースティンにあるテキサス大学で演劇学科を専攻されていましたよね？

**Glenn 博士 :** そうです。

**I :** 何故、最終的に北テキサス大学のある州都から程遠いデントンに移り、臨床心理学を専攻されたのですか？

**Glenn 博士 :** 演劇で学士号を取得してから、何年かは教えていました。その後ニューヨークへ移り、演劇もしていたのですが、ずっと図書館に通い続けて本を読んでいて、読む本読む本が心理学の本でした。なので、きっと心理学が自分の興味がある分野に違いないと思いました。それから大学院へ行き、臨床心理学を専攻しました。大学院では、最初の年に Don Whaley と出会いました。彼は、完全に私の考え方を180度変えた B. F. Skinner の "Contingencies of reinforcement" を私に手渡してくれたのです。その時から私は radical behaviorist になったのです。

**I :** それが行動分析学との最初の出会いだったのですか？

**Glenn 博士 :** そうです。それが行動分析学との最初の出会いです。そしてその日から過去を振り返ることはありませんでした。それから、臨床心理学で博士号を取得し、Center for Behavioral Studies に勤務しました。

実は、博士号取得中から働いていました。センターには自閉症介入のプログラムもありました。私も実際約10年従事していたのですよ。

I: そうなのですか？

Glenn 博士: ええ。自閉症児から非常に多くのことを学びました。

I: そうでしたか。ここからは、センターの創始者である Donald (Don) Whaley 先生のお話をお伺いします。

Glenn 博士: 彼は、頭脳明晰でした。重いぜんそくを持ち、体重を減らすことがいつも難しそうでした。健康ではなく、若い頃に喫煙していたので、ぜんそくには良くありませんでした。肺気腫だったかもしれません。しかし彼はとても優秀で素晴らしく、大変なカリスマ性もありました。キャンパスを子犬のように Whaley 先生を追っかけるたくさんの人がいました。それはまるでハーメルンの笛吹きのように Whaley 先生を始め、自閉症介入プログラムを作り、他のプログラムも作りました。一つはカウンセリングを行う、The Behavior Exchange Clinic でした。1979 年ごろから深刻な困難が続き、センターを閉め始めました。1983 年までには、プログラムに在籍する自閉症児がいなくなり、あらゆる手を尽くしたのですが、センター全てを閉めました。それから彼は School of Community Service の教授職に専従しました。そして 1983 年 10 月、彼は突然亡くなりました。本当に予期していませんでした。49 歳でした。若すぎます。私は学部長から、彼が教えていた教科を教えるよう頼まれました。当時、行動分析学の科目が 4 つありました。

I: センターはなくなったのですか？

Glenn 博士: (笑い) 私だけでした。Janet Ellis はいました。しばらくいなかった時期がありましたが。彼女と私で・・・まず私が、準備が整ったら彼女が戻って来るという前提で始めて、彼女を取り戻して、二人一緒に働きました。それから何人かを迎え入れて・・・ちょっと待って。現在、このことについて本を書いています。

I: そうなのですか？

Glenn 博士: ええ。インターネットに公開するつもりです。なので、これらのこと全て読めるようになります。

I: 素晴らしいです。

Glenn 博士: 本は大長編になります。本の半分は Don Whaley が亡くなる前で、残りの半分は彼の死後です。

I: とても楽しみです。

Glenn 博士: 何年か前に書き始めました。今は大体、第 3 部に達しています。

I: スキナーの自伝も 3 部作でしたね。

Glenn 博士: そうでしたね (笑い)。



### 3 : Founding the first “Department of Behavior Analysis”

I: センターのプログラムは、Dr. (Janet) Ellis と Dr. (Joel) Greenspoon で発展させたのですか？

Glenn 博士: そして、Cloyd Hyten です。長い間、Cloyd と Janet と私の 3 人でした。そして Dr. Greenspoon が来ました。彼は退職していましたが、私たちのためにいくつかのクラスを教えてもらっていました。彼がいて本当に良かったです。それから教員を増やしていきました。

I: なぜ修士課程が強烈なのか教えていただけますか？例えば、インタビュアーが在籍していた頃は、大学の修士課程で必要とされる最低単位を遥かに越えていました。最初からそうだったのですか？そしてそれは何故なのですか？

Glenn 博士: 行動分析学は、心理学の一分野としては教えることが多すぎると思っています。心理学のプログラムに在籍していたら、更にたくさんのことを学ぶ必要があり、行動分析学については大して学べません。本当にちょっぴりです。それでは行動分析学を学ぶには全く十分ではないということを知っていたからです。行動分析学を学ぶには intensive work が必要とされます。ですから、修士課程はそうにしたかったし、卒業生には、ちょっぴり行動分析学を知っていますではなくちゃんと行動分析家に、リアルな行動分析家になって欲しい。1つの分野だけ出来るのではなく。在籍中に2つの実習を必須にしているのは覚えているでしょう。

I: はい。

Glenn 博士: 行動は行動であり、2つの異なった分野で、同じように機能します。しかし2つの異なった分野で実践しない限り、それを理解できません。全ての分野をまたいでみなければわからないのです。だから、本当に intensive なプログラムであることが重要なのです。ABA (当時の名称: 国際行動分析学会(ABAD)のこと) 認定プログラムは、コンセプト、基礎実験、応用のコースが必要です。私たちのプログラムは全て含んで

いますし、その上、偏りのない、本当に良い行動分析家にする為に必要だと思うことを加えています。そして、学生達は非常に素晴らしい成果を上げていると思っています。

**I:** そうですね。自身としては、北テキサス大学で学んだことが役立っていると思います。

**Glenn 博士:** そして、対象の置かれている状況も学ばなければなりません。自閉症児への介入をしているのであれば、自閉症児を知らなければなりません。また、子どもについても学ばなければなりません。しかし、それらを学んだら、行動分析を適用すれば良いことを学んでいます。ともかく、もし自分のことを「行動分析家」と呼ぶならば、それなりに幅広い基礎知識が必要だと思ったのです。ですから、修士課程を修了するのに時間がかかるのです。そう言う訳で、ほとんどの修士課程のどこよりも長いのです。北テキサス大学の修士課程の最低必要単位は 36 単位です。42 単位の修士課程のプログラムはほとんどありません。私たちの修士課程は、42 単位と、48 単位です。とても長い修士課程です。

**I:** 応用コースの単位の方が多いですね。

**Glenn 博士:** 応用コースが 48 時間です。

**I:** そうでした。アメリカ人の学生でも、2 年では修了できなかったのを覚えています。

**Glenn 博士:** これまでに基礎コースで 1、2 人いました。基礎コースを選択する学生はだいたい他大学の博士課程に進学しています。

**I:** そうですね。

**Glenn 博士:** そのうちの一人が Kathryn Mistr です。最初の世代の学生です。事実、彼女が修士論文を書いた最初の学生で、その修士論文は、Analysis of verbal behavior 誌に掲載されました。

**I:** しかし、博士課程はありませんね。

**Glenn 博士:** ありません。これに関しては、機会を逸した感じです。いつか実現すると期待しています。



**I:** 博士課程を持つことはあきらめていないのですね。

**Glenn 博士:** 個人的に博士課程を持つ必要があると思います。修士号であれだけ単位を取っていたら、もう少し頑張って博士号を取得しても良いのでは、と。

**I:** 行動分析学の哲学的、倫理的、概念的側面を実践介入とともに修士課程で学ぶことは、非常に豊かで中身が濃いと思います。

**Glenn 博士:** そうです。

**I:** もしプログラムが博士課程を持ったら、研究を重視することになるのでしょうか。

**Glenn 博士:** そうです。多くの研究ですね。たくさんの教科は必要とはしないでしょう。恐らくいくつかのセミナー形式のクラスでしょう。しかし、主には、たくさんの研究をすることです。

#### 4 : Transition of the Department: Cultural evolution

**I:** しっかりした基盤と同時に学部 健全さも発展します。それについてはどうお考えですか？インタビューは、年々学部が変わって行くのを見てきました。プログラムを立ち上げた当初と比べて、現在の学部はどのような変化があったとお思いですか？特に感じる部分を教えて下さい。

**Glenn 博士:** 私はこれまでの過程を 3 つのステージに分けています。最初のステージは先程述べた通り、Cloyed Hyten, Janet Ellis, myself, and Joel Greenspoon で教えていた期間です。6 年ほどでした。私たち 3 名と、客員教授の Joel でした。それから、Rick Smith と Jesus Rosales, が、少し後に Shahla, と Manish が加わりました。ここまですべてを第 2 ステージだと考えています。

**I:** その時期に在籍していました。

**Glenn 博士:** 最初のステージに比べると幅広いステージでした。たくさんの実習の機会があったからです。最初の 3 人の時点では、そんなにたくさんの実習の機会はありませんでした。Rick と Jesus、その後に Shahla と Manish が来てからは、幅広い、たくさんのお機を学生に与えることが出来ました。この時期に学生は本当に目立ってきました。今や、最初の 4 名がいなくなりました。あつという間でした。1 年半の間に、Cloyd, Janet と私が常勤ではなくなりました。Joel は少し前に亡くなっていました。これはとても急な変化でした。そしていなくなった 3 名分を補充することは出来ませんでした。まずたった 1 人、Traci Cihon を雇用できました。そして、1、2 年待って、John Pinkston を雇用できました。そしてまた 1、2 年待って、Karen Toussaint を雇用できました。これでやっと 7 名の教員体制に戻ったのです。しかし、違う 7 名です。ですからある意味、私の理解の及ばない変化があります。現在、私は修士課程での採用のプロセスには関与していません。既に修士号を持ち、BCBA の取得又は維持のための e-learning<sup>\*3</sup> のプログラムのみを実施しています。リタイヤしてから、e-learning に集中していましたが、これも学部の中での大きな変化です。20 年の安定の

のち、大規模な人員の変換が短い間に起きました。興味深いですが、私からはとても上手く行っているように見えます。私の知る限りでは、学生が学び、ハッピーです。

**I:** プログラムに在籍している学生数はいかがですか？変わっていませんか？

**Glenn 博士:** ずいぶん前は、各学年最高 20 名でした。そうであることは今でも変わりません。7 名の教員で、20 名の修士課程の学生、そして 3 年のプログラム・・・これが限界です。そしてこのサイズは変わりません。

**I:** 私が在籍した時には 20 名の定員の始まりの時期だったと思います。

**Glenn 博士:** そうです。詳しくは覚えていませんが、初年は 6 名でした。それから 12 名になり、12~15 名の時期が 5 年ほど続きました。それから 20 名になり、以来ずっと 20 名です。

**I:** 戦略のプランなどがあったのですか？

**Glenn 博士:** いいえ。皆プログラムについて理解するのに時間を要しました。北テキサス大学で行動分析学の修士課程を始めるということ在国内の行動分析の仲間に伝えた時、「行動分析学の修士は有用であるという手紙を書いてくれませんか」と頼みました。相当数の返信が、「行動分析学修士を持つ学生は仕事に就けるとは思いません」というものでした。彼らは心理学や、社会学、教育でもない分野の学位を持つことに懸念を示しました。そして私は「学生たちは就職できると思いますし、人々は行動分析を必要としていると思います」と言いました。もし彼らが「行動分析家」と呼ばれば、行動分析家として仕事ができるのです。ですから、私たちははたかくやってみて、うまくいきました。最初から、全国的に学生を受け入れました。テキサス州からはほとんど来ませんでした。

**I:** そうなのですか。

**Glenn 博士:** 最初の何年かは、デントン在住、もしくは北テキサス大で学士を取得した学生はいませんでした。最初の 4 名の学生は、Greg Madden、Doug Field、Vicki Ford、Manish Vaidya でした。同時に、学際的な修士プログラムに所属していた何名かの学生もいました。その中に、Guy Bruce と Leslie Burkett がいました。プログラムの 2 年目には、行動分析学の修士プログラムがあるという噂が広まり、各地から来ました。最初の学生達が卒業してからは、学生が本当に来るようになりました。そのうちに、世界中から学生が集まりました。ノルウェー、イギリス、アイスランド、中国、ブラジル、コロンビア、そして日本から！

**I:** 笑い。そうですね。私もその 1 人でした。他大学にこのようなプログラムをお勧めしますか？

**Glenn 博士:** お勧めします。第 1 に学生は明確によりトレーニングを受けます。良い仕事を得て、良い収入を得ています。そして向上心があります。ABAI の年次大会に参加しています。卒業したら学会参加しないことが多いのですが、このプログラムの卒業生は ABAI に参加します。私にとってはそれが指標です。もしプログラムの卒業生が ABAI に参加したら、これだけではないですが、その他を含めてよりトレーニングを受けたということだと思います。

**I:** ABAI は行動分析のコミュニティーですから。

**Glenn 博士:** 多くの仲間と交流できるコミュニティーです。専門分野について深めるのも大事ですが、興味がどの分野にあっても、行動分析学の動向を知ることが出来ます。先程話したように、良い行動分析家になれば、ある所で学んだことを、別の所で役立てることが出来ます。私たちのプログラムの卒業生が ABA に来続けるのは、幅広い視野を持つトレーニングを受けたからだと思います。そう言う意味では、もっと多くの行動分析学部があったら良いなと思います。現在いくつかあります。ニューイングランド州に一つ行動分析学部があります。それから、シカゴの心理学専門大学に行動分析学部があります。現在はいくつかあります。とても嬉しく思います。個人としては、行動分析学部が実現可能であり、機能しているところを見ることが出来て、そして実現の助けになったことは本当に喜ばしいです。

**I:** 再現性ですね。

**Glenn 博士:** もっともっと成長して欲しいです。

**I:** 文化的な随伴性ですね。

**Glenn 博士:** そうです。

**I:** この行動分析学部は淘汰に耐えましたね。

**Glenn 博士:** 日本はどうですか？日本で行動分析学部は創設できますか？

**I:** アメリカと制度が違いますしわかりませんが、大学の 신설や、学部名を変更するなどを見たりしますので、可能性はないことはないのだと思います。



**Glenn 博士**：それは良い機会です。動くべきです。私は本気ですよ。良い機会です。私たちは機会をうかがわなければなりません。幸運にも比較的自由的な大学にいました。枠から外れているようなものでした。それが、私たちがやったことを試してみるようなところ。「やってみましょう。そして、もし上手く行かなければ、中止すれば良いのです」と言えればいいのです。失うものはありません。

**I**：一つのアイデアですが、日本行動分析学会が全体として行動分析のプログラムを持つような戦略的プランを持つのはどうでしょう、とか思ったりします。

**Glenn 博士**：良いですね。プログラムは良いと思います。学部はさらに良いです。私たちは学部になる前はプログラムでした。学部になる 6 年前に行動分析学修士を創設しました。コミュニティーサービス・スクールの行動分析学センターでした。それから、学部として受け入れられました。2つを同時に始める必要はありません。プログラムを先に持ち、それから学部を持てば良いのです。

**I**：そうですね。このインタビューののち、今後はどうなるのでしょうかね。

**Glenn 博士**：そうですね！楽しかったです。ありがとう。

### 5 : Message to Japanese behavior analysts

**I**：どうもありがとうございました。最後に一つ、日本の行動分析家の皆さんにメッセージをお願いします。

**Glenn 博士**：たくさんの日本の行動分析家にお会いしてきました。そしてとても良い印象を受けています。もし、日本行動分析学会が戦略的なアプローチでどこかにプログラムを設立したら、きっと行動分析学部が、そうでなくてもまた他の形で設立できると思います。もし日本の行動分析学で実現したら、米国にも大きな影響があると思います。米国でも行動分析学はあまりないからです。米国は大きいです。ABAI が大きいので行動分析学も大きいと思いがちです。しかし、他の領域の他のプログラムに比べれば、米国内ではとても小さいです。他の分野の中にいたら、あなたは追い払われてしまいます。ですから、私たちは独自のプログラムが必要です。なぜならもしあなたが独自の分野にいたら、皆あなたを取り除くことは出来ないからです。ですから私たちは独自のプログラムが必要です。ブラジルやノルウェーはそれぞれ優秀なプログラムを確立しつつあります。日本でも行動分析学を発展させる力があります。ですから、個人的には日本とブラジルとノルウェーは私たちの未来だと思っています。

**I**：ありがとうございました！



注) 参考 URL

\*1 Dr. Glenn のホームページ

<http://sigridglenn.org/> 公式 HP です。

\*2 北テキサス大学行動分析学部

<https://pacs.unt.edu/behavior-analysis/> 公式 HP です。現在の教員のページは

<http://pacs.unt.edu/behavior-analysis/faculty-and-staff> です。

\*3 e-learning 行動分析学オンラインコース

[https://bao.unt.edu/BAO/bao\\_overview.html](https://bao.unt.edu/BAO/bao_overview.html) BCBA 受験のためのコース、それ以外の行動分析学のコース、BCBA 取得後の資格維持単位 (CEU) のためのコースの 3 部門から選択できます。

インタビュー日：2013 年 5 月 25 日 (第 39 回国際行動分析学会年次総会期間中)

インタビュー場所：Hilton Minneapolis Hotel

インタビュアー：是村由佳 / インタビュー補助：近藤鮎子

このインタビュー記事は、日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニューズ 2014 年冬号 (No. 77) に掲載されたものに加筆修正したものです。紙幅の制約上ニューズレターには掲載できなかった原文もホームページに収録いたしました。